

被災地の就活生に対する支援

—J-ILPT労働大学校の取り組みと ハローワークの就職面接会—

東日本大震災で被災した新卒者などの就職活動を支援するため、労働政策研究・研修機構（JILPT）は今年

の五月から、就職活動のために被災地から上京してきた就活生などに対し、労働大学校（埼玉県朝霞市）の宿泊施設を無料で提供している。七月一日～一五日には、都内で開かれた「第一回新規大卒者等合同就職面接会」（東京新卒応援ハローワークおよび、東京都、東京労働局の共催）などに参加するため、岩手、宮城、福島の被災三県から訪れた約六〇人が宿泊。労働大学校では、夜の時間帯を活用し、宿泊者に対して就職活動支援セミナーなどを開催し、就職活動の面でも就活生を後押しした。

厳しさを増す就職戦線

大学生をとりまく就職環境は一層きびしさを増している。今春卒業した大學生の就職率（四月一日現在）は九一・〇％となり、就職氷河期と呼ばれた二〇〇〇年を〇・一％下回り、統計を取り始めた九七年以降過去最低を更新した。

震災直後から企業の内定取り消しや入社時期の繰り下げも相次いでいる。厚生労働省のまとめによれば、六月三

〇日現在、大学生などの採用内定取り消しは一六八件、入職時期の繰り下げは九六六人にも及んだ。

こうした事態を重くみた厚生労働省は大学生に対する就職支援を強化するため、全国のハローワークに配置されたジョブサポーターの人数を一〇〇人増やしたほか、新卒応援ハローワークに「学生等震災特別相談窓口」を設置するなどの対策を打ち出した。

交通手段と宿泊先を用意

被災地の学生に東京の企業にも目を向けてもらおうと、岩手、宮城、福島の三県から無料バスを運行し、宿泊先も用意する。JILPT労働大学校も、宿泊先を提供するなどの連携を図っている。

東京での就職活動に意欲

こうした取り組みは、被災地の学生にどのように受け止められているのだろうか。

東北工業大学（仙台市）に在籍するAさん（21）は、「震災後、停電でパソコンが使えず就職活動で出遅れた。ゲーム・アミューズメント業界が第一志望だったが志望する企業の応募は三月で締め切られてしまった」。そんなとき、

ハローワークで今回のバスツアーを知ったという。「面接会では警備や番組制作会社のアシスタントディレクターの仕事にも視野を広げてみたい」と意欲をみせる。

就活支援セミナーを開催

七月一日夜、大型バスに揺られ、被災三県から就活生が到着。就活生は翌二日からさっそく、合同説明会や、応募した企業の筆記試験や面接試験に臨むため、リクルートスーツで労働大学校を飛び出していった。

大学校は普段、労働基準監督署やハローワークの職員など厚生労働省の労働に関する事務を担当する職員に対して体系的な研修を実施するとともに、職業適性検査やカード式ガイダンスツールなどの研究開発を含めたキャリアガイダンスに関する研究を行っている。就活生の就職活動に役に立つ専門知識やさまざまなツールも備えていることから、今回、就活生が労働大学校内で時間的に余裕がある夜間を活用し、セミナーなどを開催することにした。

一二、一四日の夜七時から「就職活動支援セミナー」を開催。一三、一五日の同じ時間帯には「VPI職業興味検査セミナー」を開いた。VPIとは、

Vocational Preference Inventoryの略。興味のある職業分野を知り、自己理解を深めるための大学生などを対象とした職業興味検査で、セミナーではこの検査を行うとともに、活用方法などについて解説した。

模擬面接も実施

一二日に開催された就職活動支援セミナーの会場をのぞいた。この日は八人が参加した。

JILPTの下矢雅美・大学校長が冒頭、「今年度の就職環境は大変厳しいと聞く。一層の困難もあると思う。察しみながら受講し、少しでも役立ててほしい」と参加者を励ました。その後、比留間誠一・准教授が首都圏における就職活動の状況を説明するとともに、面接の心得を解説。東京経営者協会のアンケート結果を紹介しながら、「みんな、あきらめることはないよ。日本を代表する企業だって被災した学生を配



労働大学校で開かれたセミナーで、亀島准教授の講義を聞く就活生（7月12日、朝霞市）

慮すると言っているのだから」と熱弁。「本当にやりたいことをよく考え、企業の冠で選ぶのではなく、さらに一歩踏み出して欲しい」とアドバイスした。後半は亀島哲・准教授が面接ガイダンスを実施した。「面接では話すことだけでなく、面接官の言うことをよく聞くことも大事。会話の一つと捉えてみて」などと指導。ビデオや参加者一人の模擬面接をビデオに録画し、参加者どうしで議論するなど多彩な内容となった。

本番の面接で実践したい

セミナー終了後、石巻在住で岩手の大学に通うある女子大生は「隣の友人どうしで模擬面接をやり、お互いのよい点を指摘し合い、その点をアピールするようにアドバイスをされた。本番の面接でぜひ実践していきたい」と語った。大学では、キャリア形成についての授業をとっており、今回の上京はその教官にすすめられたという。

地震発生時の二時間前にはちょうど松島に遊びに来ていた。松島からの車での帰路に地震にあり、「危なかった」と話した。

青森出身で岩手の大学にかよう男子学生は、日中、ある企業の一次試験に参加したが、「面接では口がつかかかった。筆記もボロボロ。作文は時間が足りなかった」と顧みだ。食品関係が希望だとし、最終日の一六日まで滞留して積極的に活動すると意気込みを語った。

就職活動支援セミナーとVPI職業興味検査セミナーには、四日間で計二十七人が参加した。

東京新卒応援ハローワークによる就職支援

東京都、東京労働局、東京新卒応援ハローワークは七月一二日から一五日までの四日間、来春卒業予定の大学生や既卒者を対象とした第一回新規大卒者等合同就職面接会を開いた。参加した企業数は約一五〇社。最終日の一五日、会場となった六本木の新卒応援ハローワークには、三六度を超える暑さにもかかわらず、被災学生を含めリクルートスーツ姿の学生がひっきりなしに訪れた。彼らの表情は一樣に真剣だ。

求人件数は昨年より大幅増に

震災後、被災地の雇用環境は悪化しているが、それ以外の地域の求人状況はどうなっているのだろうか。実は、二〇一一年四月六月期に都内の事業所から学生職業総合センターに寄せられた新規求人件数をみると一九四七件と



新規大卒者等合同就職面接会の様子（7月15日、東京・六本木）

前年同期に比べて一五%も増えている。東京新卒応援ハローワークの水野治統括職業指導官によると、大学生に対する企業の実需が増えているかどうかは把握できていないという。

「例年、就職支援サービスなどの民間チャネルを利用して募集を行っていた企業が、助成金が拡充されたことでハローワークにも求人を出している可能性もある」からだ。

だが、少なくとも面接会に参加した企業は「この機会により人材を採れば」と意欲的だ。都内に本社がある物流社は、震災直後は交通インフラの寸断により、業務に支障が生じたものの、その後は大きな影響を被っていない。二三年度卒業予定の学生については、四五人程度採用したいと考え、面接会に参加した。

大手企業が採用を絞り込む一方で、被災地以外の中小企業では以前、学生が集まらずに苦労しているところも少なくない。とくに震災後、大企業の採用時期がずれ込んだことで、例年五月以降に活発化する中小の採用にも遅れが生じている。

学生に求められる支援は？

岩手県内の大学に通うTさん（21）は大学の四回生。同じ大学の友人三人とバスツアーに参加した。

青森県出身だが、東京での仕事に憧れており、地元で就職する気はない。今回の感触を尋ねると、「一二日の面接会ではスポーツ関係の企業の担当者と面談し、うち一社の一次面接に進むことになった」と目を輝かせた。

被災地から来た学生と一般の学生との間で支援方法に違いはあるのだろうか。

水野氏は言う。

「被災地の学生だからといって、ジョブサポーターの支援の内容が一般の学生に対するものと大きく変わるわけではないし、学生側もそれを求めているわけではない。ただ、実家が半壊するなどさまざまな事情を抱えて東京に来ていることは配慮しなければならぬ。厳しいアドバイスをしなければならぬ。厳しいこともあるが、一般の学生の場合と違って、それが逆効果になることもありうる。本人の意向を確かめながら、十分にケアするようジョブサポーターに指導している」

また、これは被災地から来た学生に限ったことではないが、大学のキャリアアセンダーからは「震災のショックからか、学生のモチベーションが震災前に比べて低下している」という話がよく聞かれるという。

震災直後、一部の大学が休講になり、キャリアアセンダーの機能も停止したことも加わり、学生の就職活動の遅れにつながっている。

こうした状況に対し、東京新卒応援ハローワークでは、大学に向き、セミナーやガイダンスを催すなど、学生に働きかける機会を増やすよう努めている。

（調査・解析部 荒川創太、米島康雄）